2章 ファカルティ・デベロップメントとしてのＩＴ活用授業モデル

１章の「人材育成のための教育改革」では、大学教育における課題を抽出し、問題解決に向けた教育の改善方策を網羅的に整理・提案し、今後の教育改革のための提言を試みた。その上で、２章では、「ファカルティ・デベロップメントとしてのＩＴ活用授業モデル」として、教員の立場からどのように授業を改善すればよいのか、具体的に検討いただけるよう、日本語・日本文学、英語、心理学、法律学、経済学、経営学、会計学、社会福祉学、物理学、化学、機械工学、建築学、経営工学、栄養学、被服学、医学、歯学、薬学の18分野の授業について、ファカルティ・デベロップメントの観点から、教育成果として求める能力を明示し、能力達成に求められる授業作りの方向性を概括する中で、ＩＴ活用して授業効果改善の実をあげている授業事例を掲載することにした。

本章では、二つの枠組みで編集することにした。

一つは、大学管理者に各分野における教育の重要性、改善の課題を理解いただくことにした。教育改善を図るには、教員の個人的努力に全てを託すことは不可能である。教員の熱き教育意欲と優れた教育指導能力だけでは、改善を継続し、発展させることはできない。それには、大学として教育の質向上に対する確固とした見識が必要であり、教育の改善に何が必要で、どのように対処すべきか、学内での制度的・体制的な問題、人事的・財政的な問題などについて的確な判断が得られるよう、各分野における教育目標を掲げた上で、コア・カリキュラムを視座しての修得すべき到達能力、教育現場での課題について、理解いただけるようにした。

二つは、教員に教育改善ための授業設計、授業運営の方向性をイメージいただき、教育内容、教育方法の研究を職務として意識いただき、ファカルティ・デベロップメントに取り組まれるようITを活用し、授業効果を高めている授業モデルを各分野で４件を上限に紹介することにした。十分な授業シナリオの検討もなく、単に授業でIT教材を提示したり、ソフトを使用したりする場面があるが、これはITの「利用」であって、授業効果を高めるためのITの「活用」ではない。そのようなことから、ここに紹介の授業モデルは、授業のねらいを実現または目指すための効果的な手段としての事例とした。また、授業設計・開発・運営の方向性については、今後、ファカルティ・デベロップメントを検討するための材料として、現在実現不可能な課題であっても、将来５年先には有用と思われる考え方をできるだけ具体的に提示するよう努めた。したがって、ITの活用にこだわらず、教育改善全般の視点からとりまとめるようにした。

そのような方針で、各分野の授業を以下のような構成で編集した。

① コア・カリキュラムを意識した教育の到達目標
（学部教育を中心に必要に応じて大学院教育も対象、一部コア・カリキュラムを作成）

② 教育現場での課題
（到達目標との乖離の実態と障害要因の整理）

③ 教育改善のための授業設計・開発・運営の方向性
（課題を解決するためのあるべき姿を提案）

④ ＩＴを活用した授業モデルの事例紹介
（授業のねらい、授業シナリオ、IT活用の詳細、授業効果、問題点・課題）

⑤ ＩＴ活用に伴う課題
（活用する上で大学として配慮すべき対応、大学で対応できない問題の整理）

⑥ CD-ROM（著作権処理済みのコンテンツを掲載：事例での教材、遠隔授業の状況等を掲載）

日本文学教育の授業

1．コア・カリキュラムを意識した教育の到達目標

なぜ大学で日本文学を学ぶのか。この問いには、自明の答えがある。歴史や伝統の多くの部分が「言葉」に集約されているのが、洋の東西を問わず人間社会に共通の特色である。だからわれわれ日本人が自分自身を知るためには、日本文学の研究こそがもっとも有効な手段たり得るのである。特に近代以前のわが国においては、中国や朝鮮と同様に、文学こそが学問の中心であり、言語・文字資料こそが歴史と伝統の中核であった。明治維新後は西欧化を目指して学問の再編が行われ、自然科学中心の傾向の中で、文学表現においても西欧モデルが追求されたが、なおかつ西欧思想は、必ずしも現代日本文化創造のキーワードたり得ていない。すなわち我が国の文化伝統の基本となるのが、日本語と日本文学であるという事実は動かしがたいのである。

語学・文学の基本は言葉である。そして大学における日本語・日本文学教育の到達目標は、「自国の言葉について深く考え、そのあり方を理解する」という一点に尽きる。しかしながら高校までの教育課程においては、「言葉」についての勉学は他分野とのバランス上、一定程度の水準を超えることはない。そこでまず国語についての基礎力を身に付けさせ、さらに日本語と、そこから生み出された文学作品についての高度な専門的考察ができるように指導することによって、豊かな教養と人間に対する深い理解力を涵養し、日本人としての文化的・精神的な拠り所を与えることが、大学における日本語・日本文学教育の当面の目標となる。言葉や言葉によって成り立っている作品、およびその歴史の研究こそが、日本文学・日本語学のコア・カリキュラムの構成要素である。

2．教育現場での課題

（1）日本語学習の自覚を啓発

日本の言葉と文学とを深く考え、理解するための課題とは何か。まずは、母国語というあまりに身近な存在に対する学生の自覚を促すことが出発点となろう。日本語だから日本人なら誰にでも出来るというのは大きな誤解である。言葉に関する感覚の鈍麻は、他人の言葉や表現を正しく理解することを妨げるばかりか、人間関係を損ない、自己の社会性をも危うくする。言葉による自己表現も他者理解と同様に重要である。これらを十全に備えるところに、文学的教養の教養たるゆえんがある。

（2）学習意欲の喚起

こうした視点から、日本語・日本文学教育のための体系的な方法が考案されなければならない。最大の眼目は、受講者の少人数化による教員・学生間の双方向性の確保と、学生の能動的授業参加システムの確立である。もちろん学生には授業時間外の自習時間が、教員には授業のための準備時間が十分に与えられていることが条件となる。教員の準備には、授業そのもののための直接的な準備と、授業内容を豊かにするために必要な研究との両方を含むものとする。とくに後者は膨大な時間を消費するうえに、業務との直接的な関連を見出しがたいという理由から、教育現場においてはしばしばなおざりにされがちである。また完全な自由選択カリキュラムは、学生の学習意欲を高めるよりは、安易な科目選択を行わせるおそれが大きいので、適度な制約による履修の方向付けが設定されている方が望ましい。

3．教育改善のための授業設計・開発・運営の方向性

（1）学外との連携による教育内容の高度化

教室というのは本来隔絶された環境であるべきで、授業中に学生ではない者が教室内に入り込むことが許されないのは当然である。しかしながら学ぶという環境の独立性と、学習姿勢の閉鎖性とはまったく別物である。情報化の技術が進んだ現在では、教材は教室外のあらゆる所に入手可能な形で存在しているといってもよい。これからの教育にとって教室と社会との連携が不可欠なゆえんである。そして新たなる教材の入手のために、ＩＴの活用がある。

例えば、教室外の諸機関や海外とのネットワーク授業などが、そうした教材入手の新工夫とはいえないだろうか。授業の中で、学内外の専門家の意見をリアルタイムで聴講できるような態勢があれば、学習のスケール自体がきわめて大きなものになる。国公私立の資料展示・保存施設および研究所等、さらには海外の研究者の協力を仰ぎ、ネットワークを介して説明を受けたり、学生の質疑に応えられるようにすれば、最先端の知識の導入が可能となり、授業自体が高度に社会性を帯びて、学生は社会や世界とのつながりを強く意識することになろう。

（2）文化資産のデジタル化とネットワーク化

日本語・日本文学の教育にとっての特色は、文化資産すなわち教育コンテンツの豊富さにある。千三百年にも及ぶ文学伝統の生み出した文化遺産は膨大であり、その研究は高度に展開して世界中に研究者が活躍している。例えば源氏物語に代表される小説の歴史は、日本文化の大先達である中国を遥かに凌駕する。または文学と共にある日本の古典演劇は、西欧演劇にとっては未知のしかも非常にすぐれたヒントとして、高く評価されてもいる。このように我が国は世界で最高水準の文化を保有しているのである。これらの資産の効果的な活用にこそ、日本語・日本文学教育の真面目がある。そのためにも文化資産のデジタル化とＩＴによる有効利用が急務なのである。

情報化の大勢に呼応して、各大学が所蔵文化財のデジタル化に取り組み始め、ウェブ上で画像データベースや目録データベースなどが公開されている。その主体は日本語や日本文学に関連するコンテンツである。それらの所在情報を一元的に把握できれば、教材利用の利便性は飛躍的に向上しよう。このような構想の下、本協会の文学教育ＩＴ活用研究委員会では、大学が所有するデジタル画像所在データベース（図１、http://www2.juce.jp/Literature/UsrSrch.html、右上の画像「かざしの姫」は慶應義塾図書館所蔵）を構築し、実験的に公開・運用している。

図1

ただしデータベース上のオリジナルの素材を教材化するにはさまざまな見せ方の工夫が必要であり、また所蔵権という障壁が人類共有の資産でもある文化財利用の足かせにもなっている。教育機関に対して開かれた文化財データベースの安定的運用は、政府もしくはそれに代わるような公的機関によって行われるべきではなかろうか。例えば、全国の大学・短大等高等教育機関が協約を結んで共同利用グループを構成し、その共同体が支弁する比較的安価な料金によって、教育関係者が自由に利用できるような、「著作権処理済み教材データベース」の構築と公開が図られるべきではあるまいか。

このように、ネットワーク授業のための環境整備、情報網の確立とデジタル資産の確保、講義・討論・課題・採点といった授業手法そのものの工夫、受講人数の絞り込みと双方向性の徹底などを伴うことにより、理想的な学習環境が提供可能となろう。おそらくは今後の高等教育のキーワードは、「高品質の教育」ということになる。日本語・日本文学の分野においても、個々の教員の努力だけではなく、環境整備の形で組織的にそのような教育を提供することが、今後の最大の目標となろう。

4．ＩＴを活用した授業モデル

インターネット会議システムを活用した国際間の比較文学特殊講義授業

1．授業のねらい

この授業では、インターネットを用いて外国大学で日本文学・文化研究を担当している教員による日本語の授業を体験させ、日本文学・文化が世界と繋がり、かつ独自の存在意義を持つことを認識させることを目的としている。

2．授業のシナリオ

本講義は、２～４年生を対象とした選択科目で、受講者数は約80名、期間は通年、単位数は４単位である。授業内容は、江戸期戯作の遍歴小説群を中心に取り上げ、日本における世界図の歴史や、イギリスの『ガリヴァー旅行記』を中心とした文学史との比較を通して、鎖国下にあった近世期の文学に於ける異国観の変遷を追うものである。その中で前期に１回、後期に２回の国際間の遠隔授業を取り入れ、外国から見た日本文学の特徴やその国での研究状況を講義している。ここでは、2006年度の「比較文学特殊講義」で７月に行われた、台湾・輔仁大学のA助教授による「台湾の日本文学研究」授業を紹介する。授業進行は、表１の通りである。

表1

所要時間	内　　容
	（導入部）
3分	・挨拶と授業案内（専修大学）
2分	挨拶（輔仁大学）
	（講義部）
20分	・動画スライドシンクロコンテンツ前半部を見る
15分	・専修大学生からの質疑応答
20分	・動画スライドシンクロコンテンツ後半部を見る
15分	・専修大学生からの質疑応答
	（まとめ）
5分	・輔仁大学からのまとめ
5分	・専修大学からのまとめ・掲示板紹介
5分	・専修大学からの“さようなら”

3．ＩＴ活用の詳細

外国大学と日本の大学を接続する授業では、ネット会議システムやソフトを用いれば双方の教室を接続できるが、実際にはブロードバンド環境が国によって大きく異なっており、授業時間内に映像や音声の乱れが生じるおそれがある。また、授業はすべて日本語を用いているが、リアルタイムの応答で90分を担当するのは負担が大きい。そこで事前に授業内容に即したコンテンツを作成している。授業の週にネット会議ソフトの接続実験を行ったが、専修大学の学生の他に輔仁大学でも学生が参加している。以上が授業外での準備である。

図1

当日の授業は時間前の約15分を用いて機器の設営を行った。具体的には、ネット会議システムを用いて両校を繋ぎ、輔仁大学の教員、専修大学の教員、質問学生用、日本側の教室全体の４面をスクリーンに写し出した。なお、授業コンテンツを見る時間は、スクリーン上には授業コンテンツのみが映し出されるが、輔仁大学の教員と専修大学の教員PCには４面が常に映し出されており、双方の教員が授業展開を確認しながら話し合いが可能となっている。ノートPCをオペレーター用も含め５台用い、それぞれにWebカメラを付け、音声はワイヤレスマイク１台を用いた。これらの作業補助は数名の大学院生と学部生が行った。学生の中で希望者が集まり、情報処理技術を身に付けてコンテンツ作りも行う学生組織「ネット授業研究会」を組織しており、そのメンバーが中心となって授業時の作業補助がなされている。図3が授業のおおかたのシステム図である。また授業終了後、輔仁大学教員への質問や意見などは「ネット授業HP」内の掲示板を用いて処理している。図４はこの掲示板の「台湾の日本文学研究」授業を巡っての学生と輔仁教員のやりとりである。

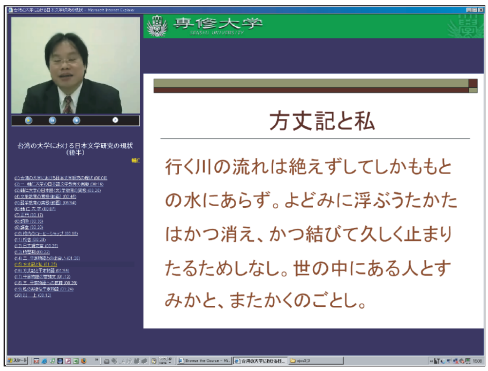


図2

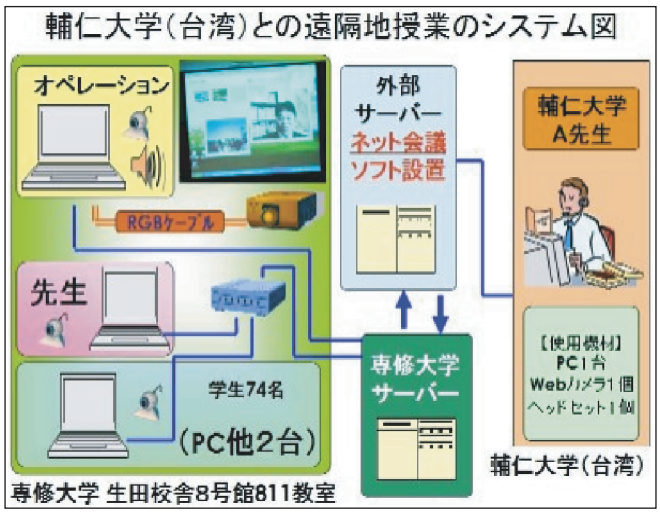
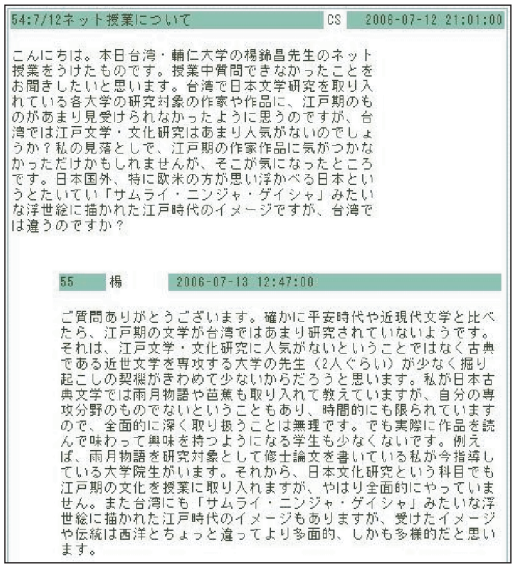


図3



54:7/12ネット授業について　CS　2006-07-12 21:01:00

こんにちは。本日台湾・輔仁大学の楊鈴昌先生のネット授業をうけたものです。授業中質問できなかったことをお聞きしたいと思います。台湾で日本文学研究を取り入れている各大学の研究対象の作家や作品に、江戸期のものがあまり見受けられなかったように思うのですが、台湾では江戸文学・文化研究はあまり人気がないのでしょうか？私の見落としで、江戸期の作家作品に気がつかなかっただけかもしれませんが、そこが気になったところです。日本国外、特に欧米の方が思い浮かべる日本というとたいてい「サムライ・ニンジャ・ゲイシャ」みたいな浮世絵に描かれた江戸時代のイメージですが、台湾では違うのですか？

55　楊　2006-07-13 12:47:00

ご質問ありがとうございます。確かに平安時代や近現代文学と比べたら、江戸期の文学が台湾ではあまり研究されていないようです。それは、江戸文学・文化研究に人気がないということではなく古典である近世文学を専攻する大学の先生（2人ぐらい）が少なく掘り起こしの契機がきわめて少ないからだろうと思います。私が日本古典文学では雨月物語や芭蕉も取り入れて教えていますが、自分の専攻分野のものでないということもあり、時間的にも限られていますので、全面的に深く取り扱うことは無理です。でも実際に作品を読んで味わって興味を持つようになる学生も少なくないです。例えば、雨月物語を研究対象として修士論文を書いている私が今指導している大学院生がいます。それから、日本文化研究という科目でも江戸期の文化を授業に取り入れますが、やはり全面的にやっていません。また台湾にも「サムライ・ニンジャ・ゲイシャ」みたいな浮世絵に描かれた江戸時代のイメージもありますが、受けたイメージや伝統は西洋とちょっと違ってより多面的、しかも多様的だと思います。

図4

４．授業効果

ネット授業の終了後、学生達に短い授業感想文を書かせ、アンケートを行った。感想では、台湾の大学の学生達の向学心に打たれ、日本文学の研究が熱心に行われていることに驚く反面、日本側の質問が表面的なものに留まって学問的な内容に踏み込めなかったことを悔やむ等の記述がみられた。

アンケートでは、「日本文学と国際性」について、「①閉鎖的で外国人には理解できない」を入学時に選んだ学生が現在では大幅に減り、「③外国人には興味と理解を持つ人も大勢いる」が増えており、その変化にネット授業が働きかけていることが指摘できた。図５は、その一例である。また、遠隔授業の受講希望を聞いた質問では、「受けたい、とても受けたい」を選んだ者が７０％を越え、「あまり受けたくない、受けたくない」は５％に留まった（図６）。

ネット授業は、学生に新しい体験をさせる中で国際的な感覚を養い、日本文学・文化に誇りを持たせるために有効であるといえよう。

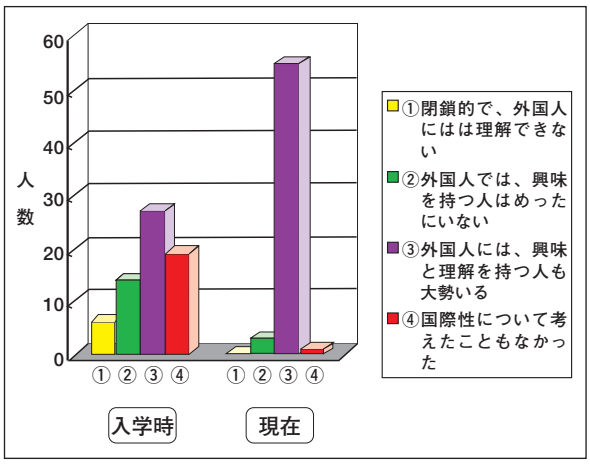


図5

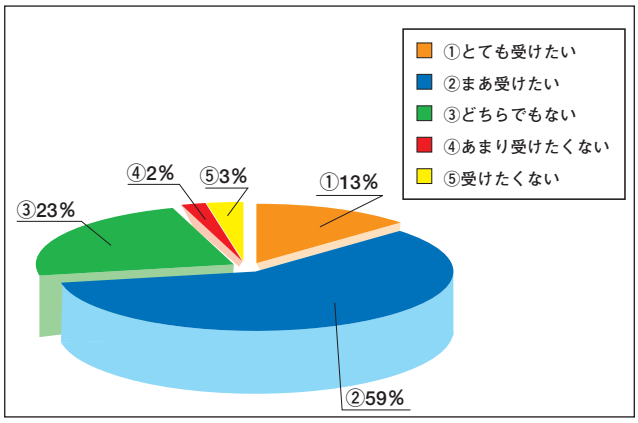


図6

５．問題点・課題

① ＩＴを取り入れた授業を行う教員は固定的で、広がりがなかなか見られない。これは教員側に機器面の扱いを避ける傾向があることと、授業コンテンツ作成を含め、必要な事前作業の多さなどに由来している。

② 学生面では、今回取り上げた授業の受講生は既に60%強の者がＩＴ活用の国際間授業を体験しており、ＩＴおよび国際授業そのものを新鮮な体験として受けとめる傾向が少ない。その分、単なる外国大学の紹介を越えて、日本文学に関わる論理的な授業内容を求める者も多く、その要求内容に応えるには、双方の教員に過大な負担を求めることになる。

③ 本授業の２日後、１年生が中心となる科目でエストニアとを結び「エストニアの俳句」授業を行った際のアンケートでは、学生達のネット授業への感激はより大きく、単にエストニアと繋がったことにすら驚きをもって授業に熱中した学生達もいた。

④ 学生たちのネット授業に対する興味は強いが、すぐに慣れ、より高度な内容を求めることになる。当然のことではあるが、彼らの要求に応え、常により良い内容を目指していく不断の努力が教員側にも求められることになるのである。

可視化教材を多用した中古文学特殊講義授業

１．授業のねらい

中古文学特殊講義（「平安朝の文学と図像の世界」）は、学生参加型の「わかる」授業の展開にねらいをおき、ＩＴを全面的に活用し、原色図像資料や画像教材を用いて、平安朝文学を知覚的・視覚的側面からも推理や判断、記憶などを促し、専門的な知識の習得と作品への理解を深めさせようとする授業である。

２．授業のシナリオ

平安朝の文学と図像の世界は、通年・４単位、選択科目、日本文学科３年生を主に対象とし、授業規模は８３名（３年次生７４名、４年次生９名）となっている。

授業では多数のデジタル図像資料を扱うので、当初数時間は掛軸の名称や扱い方、屏風についての基礎知識、料紙装飾のさまざま、雲霞の文法などから始めている。通年を前期・後期に分けて各週の主テーマを掲げる。なお、ここでは、第９週の「待つ女」をテーマにした９０分授業のシナリオとＩＴ活用の様子を紹介する。

表１　各週の授業テーマ

前期		後期	
１週	文学と図像学総論	１週～４週	伊勢物語の図像
２週～４週	掛軸・屏風・料紙装飾・雲霞の基礎	５週～８週	枕草子の図像
５週～８週	勅撰集・私家集・歌人の図像	９週～13週	源氏物語の図像
９週～10週	待つ女・努力する男の図	14週～15週	試験・予備
11週～13週	像行事（若菜摘み・端午・七夕）の図像		
14週～15週	試験・予備		

表２　第９回の授業シナリオ

分	授業内容		教具・教材
0	導入	提示する図像を細かく観察するように説明し、「蜘蛛と女性」を描く図像を数点提示する。	パワーポイントでの画像提示のほかプリントも配付
5	発問	各図像に描写されたすべての素材を複数人に口頭で回答させる。	
10	解説	図像に描かれた素材について解説する。	
15	発問	女性が「蜘蛛」をどう見ているかを複数人に口頭で回答させる。	
20	発問	なぜ「蜘蛛」が描かれたかを複数人に口頭で回答させる。	
30	解説	「蜘蛛」は「ささがに」と呼ばれ日本書記に「衣通姫」の詠んだ「蜘蛛」の歌があることを解説する。	パワーポイントでの解説
35	解説	「衣通姫と蜘蛛」の図像を見せ日本書記・古今集の当該歌を解説。	
45	解説	古今集などの勅撰集恋歌に多数「蜘蛛」が詠まれることを解説。	パワーポイントでの解説のほかプリントも配付
60	解説	新古今集入集の道綱母歌と導入時の画像が同一場面であることを解説し、当該図像を通して女性たちの心境を創造させ理解させる。	
70	解説	源氏物語帚木巻の藤式部丞と女の「蜘蛛」にまつわる一節を取り上げ、その様相を理解させて、両人の愛の在り方について考えさせる。	
85	解説	まとめ	

3．ＩＴ活用の詳細

プロジェクター、大型スクリーン設置の120人用教室で、パワーポイントを使用した授業である。授業では、王朝文学の世界で恋人の訪れを待つ女性たちが、夕暮れ時に「ささがに（蜘蛛）」の活動に注視し、恋人の来訪を確信したり、諦めの心境でなおも待つ女の心のありようを中心に講義する。その際、「ささがに（蜘蛛）」と「女」を描いたデジタル図像資料を用いて、受講生に想像力を喚起させるとともに、文学作品の世界について理解を深めさせる。

（1）授業の実際

① 導入（授業開始時）

図１は、導入時の画面で、何が描かれているか観察させる。図像左上に、簾から糸を垂れる蜘蛛の存在に気づいてほしいのだが、学生の関心は几帳から顔を覗かせる女性の容姿美などに集中する。古代日本の俗信に関する知識を習得していないためである。

図1

② 発問（15分経過）

図２を見せて図像を観察させる。学生は女性の下方に大きな蜘蛛の巣と蜘蛛が存在することを知るが、女性が古代風であることに気づいても、なぜ蜘蛛が描かれるかを説明できる者はほとんどいない。蜘蛛が描かれることから図像に気味悪い印象を持つ学生が多い。

図2

③ 解説（30分経過）

図３は、画面の図像が「日本書紀」で蜘蛛を詠む衣通姫を描くことを解説した後、「古今集」入集の同一歌を掲げて「蜘蛛」が「ささがに」と呼ばれたことや、蜘蛛の活動が恋人来訪の前兆とされたことなどを講義する。

④ 解説（45分経過）

図４は、勅撰集や私家集などに多数「蜘蛛」が詠まれることを講義する。

⑤ 解説（60分経過）

図５は、導入時の画像が「新古今集」入集の道綱母歌を素材にしたものであることを解説し、この図像を通して王朝文学における「待つ女」の心境を想像させ理解させる。

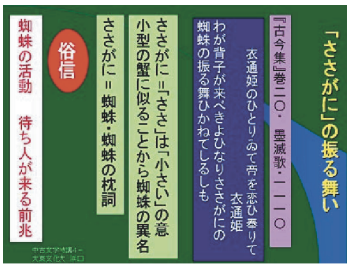


図3

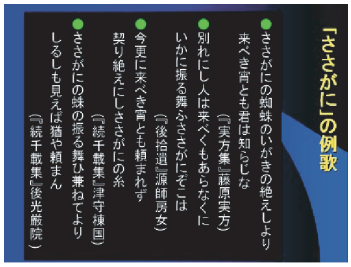


図4

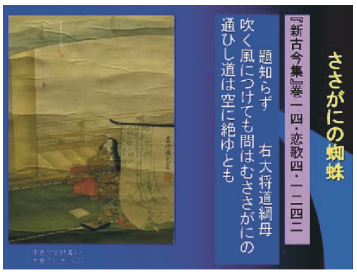


図5

（2）ＩＴ活用で配慮すべき点

① 聞くだけ、眺めるだけで終えてしまう学生には、ノートをとるように促すことが必要である。

② 講義内容の画面切替えを早くしてしまうと学生はノートをとりにくいので、画面切替えのタイミングをはかる必要がある。

③ パワーポイントを90分間フル活用すると睡魔に襲われる学生が出てくるので、適宜発問して回答させたり、作業をさせたりすることが必要である。90分間の緻密な授業設計を事前に検討しておくことが重要である。

４．授業効果

① 作品を形象化、新たな考えを発見

活字媒体だけでは理解させがたい授業において、ＩＴを活用した図像の提示は文学作品の素材や世界へのイマジネーションを膨らませると同時に、文学作品の世界を具体的な形象を通して理解させることに有効である。その際、提示する図像は、同一テーマのものをできるだけ多数示すことが望ましい。多数提示できれば図像の類型や非類型、変容などを知り、そうした学習を通して文学作品の素材や表現、世界などについての新たな考えを発見する糸口になるからである。

② 日本古典文学への関心を喚起

図像を活用することで図像への新たな知識や関心を持たせ「文学と美術」の広範なテーマで日本古典文学への関心を喚起させることが可能になる。また、彩色図像の提示は部分拡大も可能で、肉眼で可視し難い細部についても解説することができ、古典文学の学習には大いに効果的である。

５．問題点・課題

（1）図像収集に多大な時間や労力、問題が伴う

① 同一主題の図像をできるだけ多く提示して、図像の類型性や非類型性、描かれたもの・描かれなかったもの等を学生に考えさせ、図像を介してあらためて文学作品の表現方法や背景の一端を理解させる授業を展開しているので、さまざまな図像を収集・用意することに多量の時間消費と苦労が伴う。

② 授業は彩色図像（白描図も含む）を基本にして展開するので、目的の図像収集に苦労する。

③ 教材化する図像には、古美術売立て目録などから借用する場合もあり、有益な図像でありながら、授業内でしか活用できないという所蔵権問題がある。

（2）教材作成支援センターなどの設置が望まれる

授業を教員と学生の関わりとしてのみ受止めるのではなく、カリキュラムを編成する学科全体の問題として考えてみるならば、学科内などに「教材作成支援センター」や授業に効果的な資料を蒐集する「教材資料蒐集センター」等の設置が不可欠となる。また、併せて学外の関係機関との連携の中で教材等の相互利用が実現されるようにすることも今後の課題である。として考えてみるならば、今後は学科内などに「教材作成支援センター」や、授業に効果的な資料を蒐集する「教材資料蒐集センター」等の設置が考えられてもいいのではないか。

データベースを活用した日本語史の授業

１．授業のねらい

この授業では、日本語の歴史を文字表記と音韻及び文法を軸に古代・中世語を中心に言及する。その上に立って、各事象の変遷がなぜ発生したのかを考え、日本語さらには言語そのものの変遷の原理を追究する。そのため、実際の資料例に即して古写本類に取り組むことの意義と基本的な姿勢についても示していく。馴染みの薄い古写本を如何に具体的なイメージとして捉えさせるかが大きな課題でそこにＩＴ活用のねらいがある。

２．授業のシナリオ

日本語史の授業は、２年生対象の必修科目、通年４単位、受講生80名である。ここでは前期の第７～９回目の訓点資料の授業を紹介する。訓点資料は、日本語の歴史的変遷を明らかにする上で大きな役割を果たしている資料であり、学生のモチベーションを高める工夫と具体的なイメージ作りによる理解が必要である。そこで、漢文訓読の歴史を辿り、漢文訓読における表記と訓読方法の変遷、また、基本的な訓点資料の読み方を概説するとともに、その訓読法と加点者の出自（宗派・流派）との関連について言及している。そのため、訓点資料とは何か、訓点資料を用いた研究の意義について理解させることを主眼に、以下のような３コマ分のシナリオで授業を行っている。

① 訓点資料の紹介

訓点資料とは何かを明確にするため、訓点資料の具体例を示す。

② 訓点資料に用いられた諸符号の実際

第６回の片仮名の問題とともに、訓点資料に用いられた諸符号（レ点や返点・句読点・声点等々）の歴史的変遷や機能について詳述する。

③ ヲコト点の種類とその訓読方法

ヲコト点の種類とその訓読の方法について詳述する。特に、ヲコト点の様式が宗派や流派によって異なっていることを実感させることが重要となる（図１）。

④ 漢文訓読の実際（時代による訓読の相違・加点者による訓読の相違）

同一本文が異なる時代や人物によって、その訓読自体が大きく異なっていることを、教員が実際に訓読文として示すことで捉えさせる。

⑤ 訓点資料の伝持と流布の問題

訓点資料の中で用いられているヲコト点と奥書の記述を参考とすることで、訓点資料や訓読法を誰が伝えたか、また、どのように用いられたかといった問題についても詳述し、訓点資料の研究が書誌学・文化財学・仏教史学等にも寄与することを説明する。

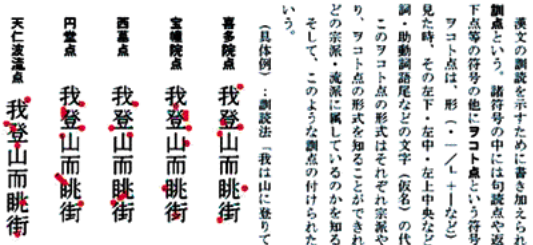


図1

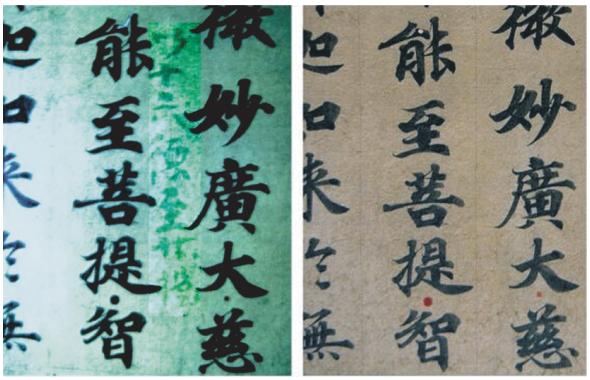
３．ＩＴ活用の詳細

（1）配布資料

学生への配付資料については、スキャニングによってPDFファイルとしてダウンロード可能にし、予習や欠席者への対応を行っている。資料自体は数回に亘って使用するため、学生自身がいつでも確認・持参が可能となるように配慮している。

（2）デジタルデータの蓄積・作成

訓点資料における加点は、墨と朱色が一般的であるが、その他にも、青・紫・緑・黄・橙等があり、その色自体にも意味が存する。それにもかかわらず、一般的な教科書の類では、残念ながら古写本類は白黒写真であり、この問題を改善することから始める必要がある。非常に初歩的ながら、この問題はネット上における訓点資料の画像（例えば、京都大學人文科學研究所 附屬 漢字情報研究センターの公開の『大唐西域記』院政期点http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/M002menu.html）を提示、また、学生にこういった訓点資料の画像公開の一覧をURLとともに紹介している。



紫外線を照射し撮影したもの　　通常の撮影

図2

ただし、単純な撮影では不可能な特殊光による撮影画像も重要になっており、LED集光装置による角筆文献の撮影や紫外線撮影・デジタル顕微鏡撮影等を行い、肉眼では見えない、または見えにくい訓点を可視化することによる成果をも学生に提示している。（図２は御嶽山清水寺蔵『妙法蓮華経』の画像）。学生にとって馴染みのない訓点資料を如何にイメージ化させるか、実際に触ることは困難にせよ、仮想体験が可能であることを配慮し、デジタルデータの蓄積と授業への活用を同時に行っている。

（3）データベースの活用

訓点資料の中で用いられているヲコト点と奥書の記述とを関連させるためには、従来その存在が知られる訓点資料のデータベースや古写本や聖教等に存する奥書のデータベースを構築することによって、加点者の素性や教学的なあり方を捉えさせることも重要となる。こういった検索を学生自身にさせることによって、訓点資料の分析を追体験させている。聖教の奥書データベースについてはネット上で公開している。（図３、http://www.orcaland.gr.jp/~utsunomiya/）。

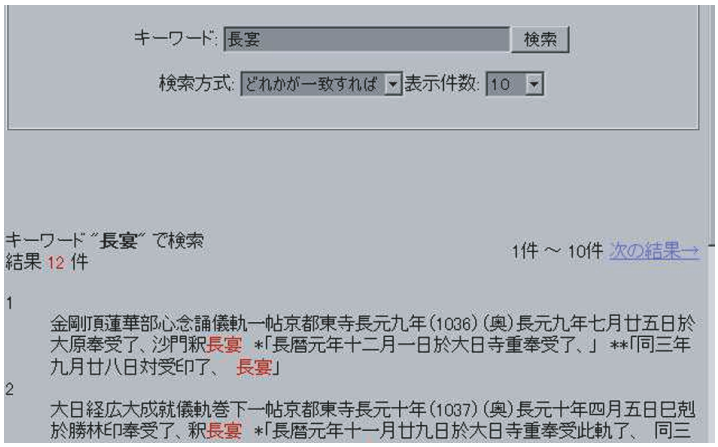


図3

(4) ネットワーク上での学習指導

学生からの授業にたいする質問や要望は、Moodleを用いて受け付けている。Moodleは、インターネットベースのコースやウェブサイトを作成するためのソフトウェアパッケージであり、教員と学生とがそれぞれにアカウント登録をすることによってセキュリティ重視の双方向のコミュニケーションが可能で、教材の登録・編集、テスト、成績管理、掲示板によるコミュニケーションといった機能がモジュール化される点で注目されている。このシステムを用いることによって、学生のレポートの添削や教材・小テスト等をネット上で容易に行い、その履歴を一括管理できるため、学生へのきめ細かな学習指導が期待できる。

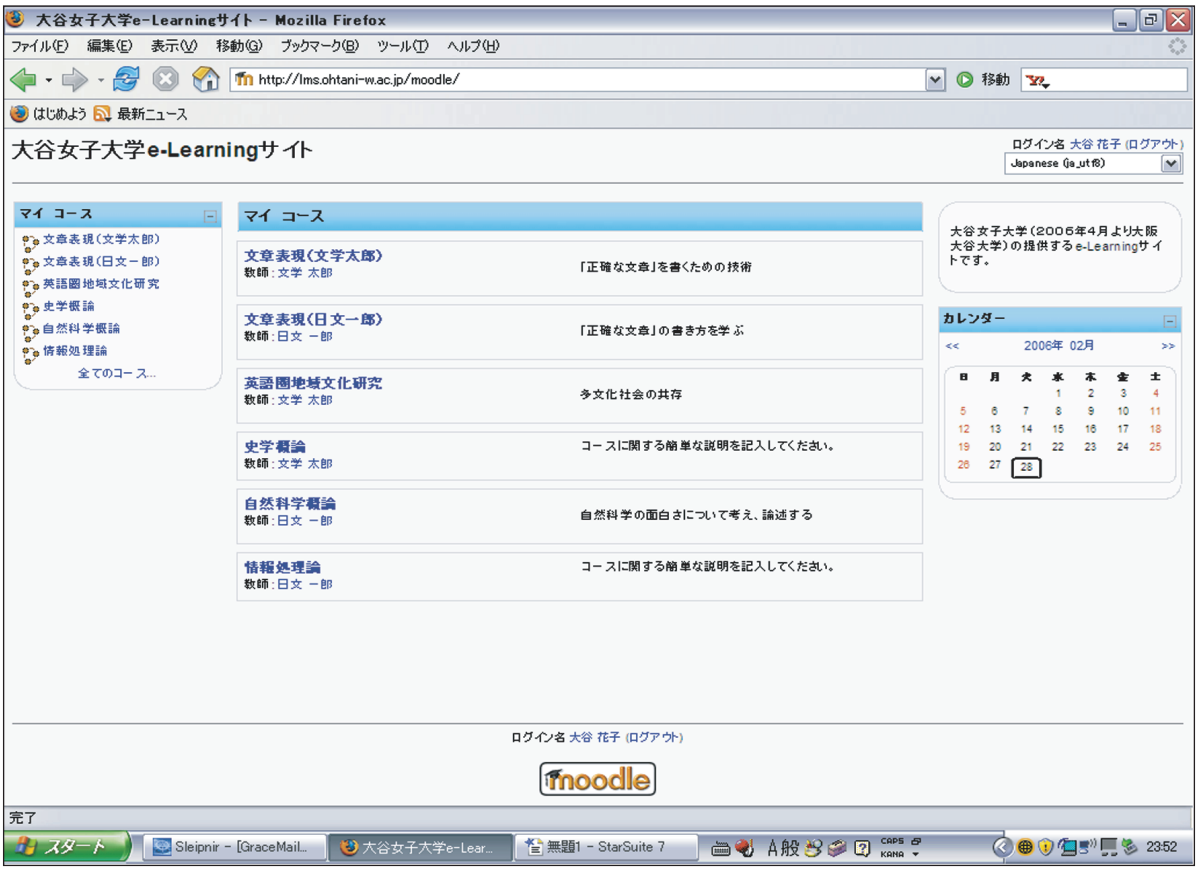


図4

4．授業効果

① 学習意欲や集中力を高める

何より視覚効果の高さを評価する意見が多い。漢文を勉強したことがない、漢文は難しいといったイメージしか持たない学生が、写本としての美しさやものとしての面白さから興味を持つことができたとの回答が多く寄せられるようになった。この点で、授業に対するモチベーションを高める上で大きな効果があったものと思われる。

② 事前・事後学習、課題学習の充実

時代毎に古写本のデジタルデータを並べることによって、実感として表記史を捉えることができ、データベースの公開により、内容の確認とその発展（レポート作成等）が容易になった。教員側から、より専門的な課題の出しやすい環境が整備できるようになった。

５．問題点・課題

① ＩＴ活用は、学生にとって非常に便利で有効な反面、易きにながれないこと、問題解決の努力を教員の側で促す必要が有るものと思われる。

② デジタルデータにおける所有者との版権問題は教材作成の大きな課題となっているが、訓点資料の場合には、特に寺社や博物館、個人蔵においても重文・国宝レベルの物も多く、その撮影や公開は特に難しい場合が多く、個人レベルで処理することが困難である。

③ データベースの公開は、授業から研究へと大きく発展させるものともなるだけに、その基礎データの信頼性が重要であり、個人レベルではなく、研究者レベルでの構築が課題となる。

④ ＩＴ活用で高められた学生のモチベーションを維持するためにも、教員自身の課題として常により良い授業を目指す努力が必要となる。

５．ＩＴ活用に伴う課題

（1）教材開発、授業システムの共同研究

従来の大学教育の現場では想定されていなかった、本格的な教材研究が必要となろう。しかもそれは共同によってなされることが望ましい。もちろん個人の力でこうした授業を実現する例も少なくないが、利用できるコンテンツの多様性や方法の開発のためには、教員チームによる教材研究の場で、実際の授業が構想されていくことが重要なのではなかろうか。すなわち共同研究プロジェクトを立ち上げ、チームとして教材開発や授業システムの開発を行うのである。本協会でも、日本文学のサイバー・キャンパス・コンソーシアムを提案し、そのような実験の場を模索しつつある。

（2）カリキュラムの見直し

従来の教育内容改善の方策としては、科目数の拡大や指導時間の延長などの人的な努力によって、教育効果の拡大を企図するなどが通例であった。しかしながら教員の持ちコマ数を大幅に増やして学生に過剰な科目を提供するよりは、コマ数を絞り込んで個々の授業にかけるエネルギーを増大させる方が、授業としては有意義なのではなかろうか。実際に授業のＩＴ化に関わる教員の負担はきわめて大きいのである。だからこそ学生の履修単位数を実質的に削減するなどで科目数のスリム化を図り、その分科目内容を充実させるということが目指されなければならない。要するにカリキュラムを管理する立場としては、より効率的でスリム化したコア・カリキュラムの構築に向けての改革が必要である。また、教室で教える立場としては、前記（１）に述べたような複数の教員からなる共同研究チームで科目プランの構想を練り、授業手法の開発を行うなどの努力が要求される。そのためには、共同研究を運営し、授業のＩＴ化を実現するための外部資金の導入、大学による財政的な支援もまた不可欠の要件となろう。